

## ロンドンのきのこ屋さん

前川 啓二

### 概要

昨秋(2019年11月中旬)、ロンドンに滞在する機会があり、これさいわいと同市にあるイギリス屈指の食材市場、バラ・マーケット(Borough Market)を訪れてきのこ売りの一角を歩いてみた。種類、量とも予想外に豊富で、人口構成のグローバル化がロンドン市民のきのこ食を後押ししている感触を得た。

### アングロサクソンときのこ

著名な銀行家でありながらきのこ民俗学者として活動したワッソン氏(R. Gordon Wasson 1898-1986)は、世界の民族が「きのこ好き(Mycophile)」と「きのこ嫌い(Mycophobe)」に類別できることを1957年に提唱し<sup>1,2)</sup>、アングロサクソンはきのこ嫌いに属するとした。

それから60年が経過した今、アングロサクソンの本家であるイギリス(とくにロンドン)は多様な民族と人種が混雑した社会に変容しており、ひょっとするとこの変容はきのこ嫌いの牙城の足元を揺さぶっているかもしれない。とかく食材の幅が狭く、味に頓着しないとされるイギリス人の食卓は確実に変わってきているのだろうか? それを知る「のぞきめがね」があるとすればそれはバラ・マーケットにほかならないだろう。これが同マーケット訪問の理由であった。

ところでバラ・マーケットはロンドン橋の

ほとりにある。マザー・グースの「ロンドン橋落ちた」の歌のとおり橋は幾度も落ちてそのたびに架け替えられたが、バラ・マーケットは不動のまま千年を優に超える歴史を誇っている。



バラ・マーケット

### きのこ屋さんのきのこ

マーケット内の一区画にきのこの店舗が集中しており、趣向を凝らしたディスプレイは食欲と購買欲をいやがうえにもそそいでいた。

大きかったり小さかったり、はたまた傘が開いていたりつぼんでいたりして外観が少しずつ異なるツクリタケの品種群が売り場で多数を占め、そのほかカノシタ、ヒラタケ、クロラップタケ、シイタケ、アンズタケ、ミキイロウスタケ、ヤマドリタケ、ムラサキシメジ、カレエダタケ(きのこのディスプレイに寄り添う、いわばきのこ界のカスミソウである)およびブナシメジが確認できた。別の

季節であればまた違うかたちと彩りのきのこが店頭を飾っていたであろう。



きのこのセット

カレエダタケがあしらわれていて、まるで花屋



Portobello と Chestnut mushroom

いずれもツクリタケの品種



アンズタケとミキイロウスタケ



カノシタ (Pied de Mouton、ヒツジの足)

なお、たとえばカノシタには Hedgehog Fungus、クロラップタケには Horn of Plenty という外観を奥ゆかしくも的確に形容した英語の名称がありながらそれぞれ Pied de Mouton、Trompette de Mort とフランス語がまかりとおっていたり、Portobello や Cep のようにもはや最初から英語をあきらめてイタリア語やフランス語の「顔パス」が通用していたりするのには店のオーナー兼売り子がラテン系国民であり、もっぱらきのこ好き民族の移民を主な顧客としているせいかもしれない。なんとなれば、ロンドンに限ればもう非イギリス生まれの市民の割合が実に40%に迫っているのである<sup>3)</sup>。もうひとつの



ヤマドリタケ (Cep)

理由として「美食の国」フランス、イタリアでの通称で販売したほうがより「おいしそう」に響くためと思われる。



Shiitake mushroom



大鍋のきのこ料理

この香りはきのこ好きを直撃する

## 考察

イギリスにも分布する食用きのこの英名がマーケットで定着していないのは、イギリスの土着料理とドーバー海峡の向こうがわの同一階層の料理がゆるやかに入れ替わったのではなく、水がしみるがごとく空白地帯に侵入してきたために他言語のきのこの名前もその調理法といっしょに、丸ごと料理文化複合として上がりこんでそのまま居座ったためと思われる。それはきのこ嫌い民族のいたしかたない降伏的きのこ文化受容だったかもしれない。ところが、驚くべきことに現在ではイギリスの栽培きのこの生産量は

日本のそれを上回っており、その点ではイギリスがきのこ嫌い民族の国とはもはや言いがたい。

イギリスのきのこ産業は、生産性の高いきのこ栽培施設を基盤として成長してきている。いっぽう、中国資本の会社がヨーロッパ各地できのこ栽培を展開し、きのこ市場を席捲しようとしている。これもきのこ食のグローバル化といえるだろう。



中国上海資本の会社の箱

イギリス人のきのこへの視点はEU離脱後どうなるのだろうか。店頭ラインナップがさらに多様化して今以上ににぎやかになるのかそれとも大陸からの流れが鈍るのか興味あるところである。また機会があったらバラ・マーケットをつぶさのにぞいてみたい。

## 参考文献等

- 1) Wasson, V. P. and Wasson, R. G. (1957): Mushrooms Russia and History. PANTHEON BOOKS/<http://www.newalexandria.org/archive/MUSHROOMS%20RUSSIA%20AND%20HISTORY%20Volume%201.pdf>
- 2) 吹春俊光 (2009): 「きのこの下には死体が眠る!？」 技術評論社
- 3) London: Census Profile: <https://migrationobservatory.ox.ac.uk/resources/briefings/london-census-profile/>